

安治川物語

写真は日本経済評論社から 1997 年刊行の西山卯三先生の著書。副題は「鉄工職人卯之助と明治の大阪」、西山卯三記念すまい、まちづくり文庫編である。まずは、大阪の歴史を考えるうえでも示唆に富む、プロローグを抜粋して紹介。



この記録は大阪に生きたある人間家族のはなしである。

大阪はいま「離陸」しようとしている。

古代の難波の都から近世の大坂、戦前的大阪という長い「助走」を経ての離陸である。しかし何処に飛び立とうとするのであろうか。

四十五億年の地球漸進化の最先端を示している「人間の英知」を忘れて、自然の一部でしかない人間がその自然を食い潰す「資本主義」の翼に乗って、生命のない成層圏まで飛ぼうとするのだろうか。

果たして飛べるのか。飛んでいるうちに翼を折って空中分解するのではないか。

大阪の町を地表に広がる人々の営みとして眺めると、西の大阪湾に向かってどんどん進出している。その過去をかえりみると、三つのステージが考えられる。

難波江のあしのかりねのひとよゆえ身をつくしてや恋ひわたるべき（皇嘉門院別当）

十二世紀後半のこの歌はいまの大阪である難波を題材にしている。大阪市のマークである濠標も歌いこまれている。しかしこのころの大阪は「難波江」あるいは「難波潟」といわれる一面に葦で覆われた低湿地だった。その東側には上町台地があり、その上にはかつて古代やまとの難波宮がつくられていた。しかし台地の下は大阪湾から海水がひたひたと押し寄せる「潟」にすぎなかった。

この潟地に堀をほって大きな町が出来たのは近世初頭の豊臣・徳川の町づくりである。これが大阪の都市発展の第一ステージである。

明治維新以後、この町の外側にすでに形成されていた新田埋立地が続々と市街化し、大阪は海の方に大きく発展する。これが第二のステージである。

第二次世界戦争はこの町を大方焼き払ってしまう。その廢墟の上に戦後の高度経済成長は新しいコンビナート都市を造りだす。それだけでない。上流から押しだしてきた土砂によって自然的に造出された土地ではなく、高度の技術が投入され海をどんどん狭めてゆく「埋立て」が行なわれた。これが現在の第三ステージである。

現代の最大の課題は、無論この第三ステージの行方をどう切り開いていくかであろう。

しかし私がここでまとめようとした記録は、それではない。主として右に述べた第二

ステージの時代のことを振り返っている。すでに国民の大部分が戦後生まれになっている現在、過去は霧に隠されつつある。その時代を生きてきた者の責任として、すこし迂遠かも知れないが第三ステージの課題を解明するためにも、もう一度それを振り返ってみようとしたのである。

この物語で、西山はいったい何を描きたかったのだろうか。编者（安藤元雄・塩崎賢明）なりの解釈を試みるならば、以下の点をあげることができる。

第一に、父母の生い立ちから成長・成功に至る過程を中心に捉えながら、それにとどまらず、自らのルーツの奥行きと広がり可能な限りとらえようとしている。そして著者自らのルーツに対する一種の総括として、卯之助の成功と限界について深い洞察が展開されている。一徹な職人氣質が彼の成功の要因でもあり、また限界でもあったとする著者の観察に、父親に対する敬愛の情と研究者らしい冷静な分析を見ることができる。

第二に、そうした社会経済的背景のもとに展開されるフィジカルな空間形成の過程を克明に描くということである。それは明治期における西大阪地域の形成過程をバックにおいて、卯之助らのすまいと工場を築いていったプロセスにみることができる。筆者は、このような明治の地域形成を歴史的にトレースするにとどまらず、大阪西部の豊かな自然と風景、そこに展開される貧しくも力強く生きる庶民の生活をみずみずしく描いている。

第三に、庶民の生活を時代の大きな流れの中での格闘としてとらえ、開国から資本主義発達への過程で、卯平や卯之助が時代の波に翻弄されながら、どのように生きる道を見出していったのかをリアルに描いている。また天皇制軍国主義の確立過程については、当時の社会心理や教育制度のみならず、個々の人物への投影としても生まなましく描いている。

(2018年4月26日)